

# 3月の和牛飼養管理

## 一 分べんとその後の飼養管理 一

和牛試験場 舟木彬介

近年肉の需要が急に伸びて来ましたので、和牛の頭数をふやし、多頭飼育をする必要性がやかましく言われるようになりました。一にも二にも、仔牛の生産増強が基礎要件です。1頭の繁殖雌牛から毎年1頭の子牛を生産し、合理的な飼い方により、和牛の増産と損耗防止につとめていただきたいと思います。このことは、和牛の改良上にも重要なことです。

春は一年中で、子牛の生産が一番多く、発育もいい時期ですが、妊娠末期を冬の不自然な飼養管理、特に運動不足、濃厚飼料の多給および青草の不足したときを過している親牛に難産や後産停滞が多発する時期でもあります。分娩をま近かにひかえた親牛には細心の注意をはらい、分娩前後の処置に手落ちのないようにしなければなりません。そこで、今月は分娩時の処置と分娩後の管理の一般的なことについて述べてみましょう。

### 1、分娩時の処置

お産の予定日が近づいたら、牛舎に電灯をつけ、牛房内はよく掃除して、常に清潔なよく乾いた敷わらを充分に入れて温かくしておきます。また、ヨードチンキかマーキュロクロム、はさみ、乾いた清潔な布などを準備しておきます。

お産は陣痛から始まり、2～4時間くらいで前肢の上へ頭をのせた形で生まれるのが普通です。3時間以上たっても、まだ生まれなときは難産かもしれませんから、獣医を呼ぶようにします。素人療法は危険です。

お産が終ると、親牛が子牛をなめて乾かすものです。初産の牛などで、なめないときは、子牛のからだにフスマをかけたりしてなめさせます。3月はまだ空気が冷めたいときですから、子牛の口や鼻にかかっている粘液や粘膜を早く布で拭きとってやります。若し仮死状態のときは、後肢をもって逆にぶらさげ、胸部を強く打つか、上下にゆするかして、人工呼吸をおこなえば、たいてい蘇生します。

ヘソはたいがい短かく切れていますが、長いときは4～5センチのところで切り、切口からヨードチンキかマーキュロを流しこんでおきます。

お産の後の親牛には、温かいミソ汁とかフスマ湯をバケツに1パイのませ、安静にして興奮しないようにします。よわりがひどいときはビールを1本か1～2合の酒を水で薄めてのませます。後産は、分娩後数時間たいてい6時間以内にでるものです。後産が残ると後日の種付にさしさわりますから注意します。また、親牛に喰せないようにしないと、ノドツマリの原因になることがあります。

### 2、生まれたての子牛の注意

子牛は、生まれて20～30分すると自力で立ち、1～2時間すれば乳を飲み始めます。起きあがっても乳をのめないものは、子牛をささえ乳頭をふくませてやります。また2～3時間も立てない子牛は、人工哺乳をすれば元気になります。もし2～3日たっても乳の飲めないような子牛は、先天性の盲目症かもしれませんから、獣医の診断を受けてください。この病気の特徴は、ヨロヨロしながら牛舎内を廻ったり、壁にぶつかったりします。

分娩後1週間ぐらいの乳を初乳といいます。初乳は、胎児のときの胎便を早く出させる役目があり、また病気に対する免疫性を与えますから、必ず飲ませなければなりません。

生まれたての子牛は、病気にかかりやすいから、温かくしてやり風邪をひかないように注意しなければなりません。

### 3、親牛のオリモノの観察

分娩後2週間くらいは、雌牛の外陰部からオリモノがします。分娩直後には多量の赤褐色のオリモノを排泄しますが、次第に褐色となり2週間位すれば灰白色に変わり次第に透明になってくるのが普通です。褐色のオリモノが2週間以上も続くときは、たいてい何か病気があると思われるから、早速子宮洗滌

## 岡山畜産便り 1961.03

をしなければなりません。これを放っておくと、子宮内膜炎等の繁殖障害をおこし不受胎になるおそれがありますから獣医の診断を受けましょう。

### 4、哺乳中の雌牛の飼い方

雌牛は、妊娠中には胎内に子牛を育て、分娩し次いで泌乳するのでよほど注意して飼わないと、次の発情がおくれたり、病気になりやすいものです。とくに初産の雌牛はまだ発育中ですから注意します。

和牛の泌乳量は、分娩直後から急に増加して10日目頃に最高乳量に達します。それから2カ月くらいまではきわめて少量ずつ減って、3～4カ月してから急に減少します。初産の牛では最高になると急に減少します。従って、乳量の増減に応じた飼料給与が必要です。また、乳を分泌するためには多量の栄養分を必要とします。殊に蛋白質・カルシウムおよびリンは子牛の体を成長させるために非常に多くの量を要求します。もしも、この栄養分の補給がないと母牛は自分の体内にある栄養分をけずって乳を出し、骨の中からカルシウムやリンを出して乳の成分としますから、やせてくるばかりでなく、分娩後30～60日でするはずの発情が離乳まで起こらないことにもなります。

哺乳中の雌牛の飼料給与量は、藁や比較的栄養価の低い野草を与える場合、次の例のような配合飼料を、分娩当時は1日2キロぐらいにしておき、次第に増して15日くらいで最高の給与量1日4.0～4.5kgになるようにして60日くらいまで続けます。2カ月目より次第に減らして、離乳の時期には2.5～3.5キロぐらいにします。離乳前10日くらいに濃厚飼料を思いきって減らせば、比較的容易に離乳ができます。

3～4月に分娩した雌牛は、丁度青草の豊富な時期ですから、畦草や野草を飽食させるだけでも充分ですが、栄養分にあまり不足のないようにするためには、畦草の中にオーチャードやクローバーなどの牧草を導入しておくとも申分ありません。

雌牛は飼い方さえ悪くなければ、また病気でないかぎり分娩後早ければ20日目、遅くとも60～70日で発情が再来します。そして、和牛にとって6、70日までに種付をするのが、もっとも受胎がよいので、特別の事情がないかぎり、つとめてこの時期までに

種付をし、毎年1頭ずつの子牛を生産することが肝要です。

### 5、哺乳中の子牛の飼い方

子牛の育成は先ず最初が大切です。育成の良否はその和牛の一生に大きな影響を及ぼし、系統のよい子牛でも駄牛になりかねません。子牛は成長につれ生理機能も日々に変化していくものですから、親身の愛情をもって子牛に接し、いつも細心の注意をはらってやる必要があります。

例 1		配合率
種類		(%)
大	麦	20
フ	ス マ	40
米	ヌ カ	20
大	豆 カス	20
カルシウム		2
食	塩	1～1.5

分娩後3～4日すれば、親と一緒に運動場に出してやります。運動と日光浴は骨のしまった力強い牛をつくりますから、天気の良い日はつとめて戸外に出して自由に跳ねまわるようにしてやることです。

子牛は、生後20日位すると、母牛の飼料を少しずつなめるようになります。この頃はまだ子牛の消化器は流動食しか消化しない状態にありますから、や

例 3		例 2	
種類	配合率	種類	配合率
		(%)	
フ ス マ 又は脱脂ヌカ	70	大 麦	20
脱脂ヌカ又は フ ス マ	24	脱脂米ヌカ	50
尿 素	3	フ ス マ	30
カルシウム	2	大 豆	5
食 塩	1	カルシウム	1～2
		食 塩	1～1.5

たらにいろいろのものを食べるとよく下痢を起しひどくなると白痢をします。従って、この時期はいつも糞の状態、発育の状態、動作に注意して、病気をしても慢性化させないようにしなければなりません。またこの頃は、母牛に与える飼料にもくさったり、カビたりしているものや粗剛な飼料を与えないように注意しなければなりません。

母牛の泌乳量の少ないものでは60～70日、泌乳量の中等以上のものでは90日くらいから別飼いにしま

**岡山畜産便り 1961.03**

す。この時期はまだ消化器が十分に発達していませんから、粗飼料を少なくして濃厚飼料の割合を多くし、蛋白に富んだものを与えます。無機物は子牛の成育に是非とも必要なものですから、特にカルシウム、ビタミンAの含量の多いものを給与するようにつとめます。その意味からいって荳科の草の給与が望ましいでしょう。

子牛に与える濃厚飼料の配合例を示しますと、次

例 2		例 1	
種類	配合率 (%)	種類	配合率 (%)
フスマ	50	挽割麦	20
大豆カス	20	フスマ	30
麦	30	大豆粕	25
コロイカル	2	トーマロコン	25
食塩	1~1.5	コロイカル	2
		食塩	1~1.5

のようになります。

1日当り給与量は次の表のように与えればよいでしょう。

粗飼料はやわらかく、良質のものを与えるようにします。

次第に飼料に慣れ、生後5~6カ月になると、いよいよ離乳しますが、離乳前10日位に、母牛の濃厚飼料を思いきり減らして乳が出ないようにした方がよいということは前に述べたとおりです。

## 豚コレラとその予防

豚コレラは、豚コレラ・ヴィールスによって発病するもので、豚の最もおそろしい伝染病です。

一たん発生するとその損害は非常に大きくなり、しかも発病を繰り返すおそれがあります。しかし、これも予防注射によって完全に防ぐことができます

区分 月令 (カ月)	メス (Kg)	オス (Kg)
3~4	0.8	0.9
4~5	1.0	1.1
5~6	1.2	1.4

が、注射をしてから免疫ができるまでに2、3週間はかかるので、流行しはじめてから注射するのは手おくれです。また、免疫の有効期間は6カ月ですから、年に2回、家畜保健

衛生所が注射を実施するときには、必ず受けておきましょう。

ところで、このヴィールスは、人や鳥獣など、いろいろのものについてひろがりますが、その潜伏期間はまちまちで、2日から21日間といわれています。

発病した豚は、体温が40~42度に昇り、食欲が減り、目ヤニ、鼻汁を出し、呼吸が困難になり、時にはセキをします。また初めは便秘するものが多く、病状が進むにつれて悪臭のある下痢をします。また、耳、くび、乳房付近に紫色のハン紋ができます。しかし最近では病状がはっきりしないものも多いので、あやしいときは必ず専門家の血液検査を受ける必要があります。

なお豚コレラは、治療の方法がないので、法律にもとづいて殺処分をしなければなりません。その場合、国から手当金が交付されることになっています。